

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 すぎなみ第五小学校5年生の国語「インタビュー名人になろう事前授業

語り手:乙坂 章子さん(ゲスト講師)
インタビューア:5年1組、2組のみなさん

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■はじめに

ゲスト講師 乙坂 章子(あやこ)さんの自己紹介

私は、TV、ラジオのインタビューア、司会、パーソナリティーをしています。相手のはなしの内容を聞いて、話の主旨を確認する、自分のことばで「まとめ」をする仕事をしています。今までオウム真理教事件や阪神大震災などの現場に行き様々な方々とのインタビューを繰り返してきました。それらの体験を通じて得たインタビューに必要な点を5つの項目にまとめました。

■アナウンサーの方はインタビューを行うに当たり、どのような準備をしているのか？

インタビューアは、語り手の姿、普段では見られないような姿をことばで捉えることができましたら最高の仕事をしたといえます。まず、相手の身になって「何を聞いてほしいのか」を考えます。そのために、語り手の情報を得るために下調べをします。新聞雑誌などの切り抜き記事を丹念に読み自分のメモ書きを作ります。自分が発信したことばが、語り手に通じてこちらが思っていない反応(リアクション)が出てくるのを内心期待しているのです。核心の質問ができれば、仕事の醍醐味を感じます。

■アナウンサーの方はどのようなことに気をつけてインタビュ

ーをしているのですか？

まず、語り手に良い印象を持っていただくことが大切です。そのために、

- ・はじめて会う方である、友達同士ではないということを心に言い聞かせることが大切です。
- ・語り手のことばを素直に、感動を持って聞くこと
- ・生きたことばのキャッチボールができるようにしたい。質問をして、返ってきたことばが感動と驚きなどに満ちていると、「やった!」と感じます。聞いている聴衆の皆さんも面白いと感じてくれる筈です。
- ・語り手が、このインタビューを受けていて楽しいなと思うような対応をしたい。語り手が心の奥で「こんな質問をしてくれたらいいのに!」と思っていることをつかみ出すことです。
- ・語り手の答えが膨らんでこない質問はしないように、たとえば、「ハイ」の一言で済んでしまう質問は聞いていてもつまらないのでしないようにする。



▲「インタビューっておもしろそうだけど、自分にもできるかなあ」興味しんしんの子どもたち

■インタビューするときの工夫

ーマナーについてー

ご挨拶です。笑顔で「こんにちは」、「本日、インタビューをさせていただく〇〇〇〇です。ご挨拶をはっきり言いましよう。身なりはさっぱりと清潔なものを着ていきます。清潔なものを着ること、汚れていれば失格

です。次に、インタビューの理由と目的を述べます。

例:大型店のスーパーの店長さんにインタビューする際、

「母と一緒に買い物に良く来ます、このスーパーは、たくさんの人が働いていて大変活気があります。職場はどのような仕組みになっているのか、どのような人たちが働いているのか、そこが知りたいと思います。私が、記事にまとめて新聞に発信します。

このようにこちらの要件をはっきり伝えるのも、マナーの一つです。

■話を引き出すためにどんな工夫が必要か。

- ・インタビューの前に下調べは必ずやりましょう。
- ・何時までインタビューを続けられるのかも確認しておきましょう。
- ・丁寧語と尊敬語は必ず使う。あいづちはていねいにする。～です。～ですね。～ます。ことばの語尾は気をつけましょう。

また、普段使っている話し言葉の合間に使う「うんうん」「へえ、そうなんだ」などは絶対禁句です。

- ・語り手の目を見て、大きな声で質問します。

■話がそれてしまったときはどうすれば良いのか。

私の失敗事例を参考に考えて見ましょう。まちの発明家をお尋ねしたときの失敗談です。下調べで「野球」が趣味であるとわかりました。私はてっきり野球をする趣味と思い込んでいましたので「野球のどんなところが好きなのですか」と聞きましたが。「ビールを飲みながら野球観戦するのが楽しみです」とのお答えでした。その方は、野球をする側でなく見る側であったということです。このような行き違いはよくあります。そのような時は「なるほど、そうですね」「私も実はそう

↘

なんですよ」と同意することが肝心です。

語り手が話したことばを、こちらが取りに行く、相手のことばを繋げていく、ことばのキャッチボール、心のキャッチボールをすることです。

最後のまとめのことばで終わります、この人と話をして良かったなと思ってくださるインタビューをしましょう。それには、人間として素直に、率直にことばを聞く、そして質問していく。心と心のキャッチボールをすることです。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 いまはもう見られない、遠い遠い昔の杉並の風景

語り手:針田雅人さん(杉並第五小学校・用務主事)
インタビュアー:5年1組 1班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■針田雅人さんのプロフィール

杉五小の用務主事で私たちが一番身近に感じている方です。1955年から2年間(昭和30～31年、小学1～2年生)杉五小で学び、その後杉四小に転校し卒業しました。杉五小の木造校舎時代の話、プールの話、当時の荻窪駅前の様子などをうかがった。

■インタビュー内容

昔の給食は、乾メンやコッペパンなどで、牛乳ではなくて脱脂粉乳という栄養は満点ですが、みんながおいしいといって飲んでいないものでした。高価なものではありませんでしたが、当時は貴重な栄養源でした。給食に使うお皿やおわんは今のようなものではなかったそうです。

家に帰るとすぐ外に遊びに行く。昔の遊びはベーゴマやゴムとび、メンコやビー玉、缶けり、竹馬などでしたが体をを使う遊びがおおく、部屋の中で遊ぶことは少なかったそうです。

学校の生徒数は、今とはくらべものにならないくらい多く、クラス1つで50～60人で、最低5組で、多い時には7組もありました。全校で1500人くらいいたそうです。

次に、杉五小の近くの様子ですが、よくみんなが見かける教会どおりのレンガで作られた道のそばのどぶ川で糸ミズをつかまえて、阿佐ヶ谷にある小鳥やさんに1桁5円～20円で売っていたそうです。このあたりは

町工場(バネ・プレス・せんばんなど)がたくさんあり、お父ちゃん、お母ちゃん、ねえちゃんが働いていたので「三ちゃんきぎょう」という工場があり、にぎやかなところでした。



▲自分で捕ったミズを売っておこづかいにしていたんだよ。今じゃあ考えられないけど町工場もたくさんあったね。

また、荻窪駅の付近は、ルミネもタウンセブンもなく、路面電車が走っていて、地下鉄はありませんでした。ほとんどの人が農業をやっていて畑がいっぱいあって、住宅は少なかった。だから、畑には、イタチやモグラがいっぱいいた。道路は今のようコンクリートでほそうされていなくて、じゃり道、どろ道だった。

昔はテレビがなく(当時2万円くらい)、駅の近くにある街頭テレビを見に行ったり、裕福な家でごちそうになりながら見たそうです。

今と違うところは、子どもがよく大人の手伝いをしていた(手伝いをしないとおこづかいがもらえなかったから)。

【針田雅人さんの感想】

いまでも早稲田から箕輪まで路面電車が残っているが、当時、青梅街道を走っていた路面電車は、荻窪が終点だった。荻窪から築地や銀座、新橋まで走っていた。その路面電車がなくなって、トロリーバスが走った。それもいまはなくなった。当時、荻窪の駅も木造だった。いま荻窪団地など建って

いる南荻窪の方は、田んぼと畑が広がっていた。アスファルトの道は少なく、土の道だったから、雨が降ると地面にしみこみ、下水に流れることがなかった。だから川の水もきれいで、どこでも水が飲めたものだ。

お店の種類もいろいろあった。今はスーパーやコンビニに行けば、いろいろな商品を買っているが、昔は、お店ごとに違うものを売っていた。魚屋さん、八百屋さん、パン屋さんといった小さなお店がいっぱいあった。そういうお店をやっている以外の家は、ほとんど農家だった。そういう昔から住んでいる人たちは、大きな土地を持っていた。豪農というか庄屋さんなんかだ。

昔は校舎が木造だったし、教室の床も机もみんな木でできていた。昭和35年以降に鉄筋の校舎に建て替えられた。

テレビは登場したばかりで、よほどお金持ちでないかぎりテレビは持っていなかった。「街頭テレビ」というものがあり、みんな街頭でテレビを見ていた。その頃の楽しみは、マンガを読むくらいだった。でも、マンガだって高かったから、そんなにたくさんは買えなかった。冷蔵庫なども各家庭にはなかった。

情報源はテレビではなくラジオ中心だったけれど、それほど多くの情報は必要なかった。地域のことを知っていれば生活ができた。杉並の中だけで一生暮らしても不自由しなかった。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 先輩が語る、50年前の杉五小と子どもたちの世界

語り手:朝倉 紘治さん(天沼在住 杉並第五小学校同窓会副会長、財団法人 エンジニアリング振興協会・研究理事)
インタビュー:5年1組 2班 3名

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。



■朝倉紘治さんのプロフィール

1950年ごろ(約55年前)の杉五小や当時の子どもたちの様子、生活の話などをうかがった。当校の第27期卒業生、約50年前のことです。同窓会の副会長であり、杉並区の活動では、杉並ユネスコ協会の会長です。先日の運動会でも来賓として出席しました。運動会の騎馬戦、徒競走では男子、女子生徒さんが一緒に演じている姿にびっくりしました。

■インタビュー内容

Q.50年前の卒業生ですが当時の風景はどのようでしたか

A. 正門前の通りの様子が違います。文房具屋さんが両方の隣、寺島自転車屋さん、前に床屋さん、日大二高のほうへ行くと今のセブンイレブンのところにいろいろな商店が入っているマーケットがありました。当時の学級は1クラス50人から55人いて5クラスでした。1学年に250人はいったと思います。天沼中学が独立する前で、杉五小に同居していたので「じゃま中」と中学生を呼んでいました。ちょうど小学3年のとき給食が始まり、脱脂粉乳、パン中心の給食でした、脱脂粉乳はまずくて、いつも食い足りないおなかぺこぺこ状態であったと記憶しています。

Q.当時の遊びは?

A.家に帰ると勉強しろといわれるので、帰るとカバンをそっと庭木の中に隠して遊びに

行った。コマ回し、カンけり、メンコ、ベーゴマなどをした。お小遣いをきちんともらった記憶はありません、何かほしいときは親に言うと10円ぐらいの駄菓子を買うお金をくれました。新宿～荻窪間の都電が3円、はがきが5円の時でした。都電は「がいこつ電車」と呼んでいた。



▲浅倉さんが見せてくれた50年前の通信簿

<50年前の通信簿、卒業アルバムなどを持参していただきみんなに披露>

A.テレビが始まったのは小学5年生のとき、今の日大二高の方のセブンイレブンのあたりに当時空き地があって、そこで街頭テレビが設置され、子どもや大人が大勢集まり力道山のプロレスを観戦した。大変感動して見ていたのを覚えています。

Q.今の小学生を見てどのように思いますか。

A.昔はかんきょうが整備されていなくて、まだ自然が一杯でした。今はかんきょうが変化して、自然、社会かんきょうを比較するとびっくりすることがあります。今の子どもを見て感じることは「えらく勉強をがんばっているな」と正直に思います。勉強する学校のかんきょうも整っているの、昔の子どもにくらべて「うらやましい」と感じます。先日、桃井第四小で開かれた杉並ユネスコ協会主催の国際理解の時間で「英語でしゃべる」子どもの学ぶ姿を見ました。小さいのに英語でよくしゃべるのを見てびっくりした次第です。

■最後に一言

よく物事を考えてほしいと思います。一つの現象を見て、楽しい、悲しい、つらいではなくて、物事の本質を見極めてほしいと思います。一寸難しい表現ですが、きっとこの考え方を身に付けると将来役に立ちます。

■補足

- ・今の家を建て替える時に仮住まいで引越をしたことがあるけれど、戦後からずっといまの場所に住んでいる。
- ・きちんとした給食が始まったのは5年生のころから。それまでは、あまり給食の時間は楽しい時間ではなかった。
- ・塾はなかったけれど、その分、家で勉強をした。特に5年～6年の時には小テストという算数と漢字のテストが毎日のようにあって、漢字もいっぱい覚えたり、計算力もついていた。それがその後の基礎になっていると思う。
- ・昔はパソコンがない、当然パソコンゲームもない。だから、子どもは外でよく遊んだ。
- ・当時、校舎は木造2階建てだった。冬の暖房は石炭ストーブがあった。



▲今の学校は勉強するかんきょうが良くなっているのがうらやましいですね。

【朝倉紘治さんの感想】

このように小学生と向き合ったのは何十年ぶり、初めはとまどったが、子どもの真剣なまなざしに引き込まれていった。私達の時代は戦後の満足に食べ物もない時代

↘

であったが、あまりつらい思い出はない。皆同じ境遇の子どもたちは物がないうちに遊びを考える。よく遊んだ記憶がある。また、“勉強しろ、勉強しろ！”と四六時中いわれて机に座らされた。塾があるわけではないので勉強は自分で考えて予習と復習をやった。今の子どもは、色々なものが整っているんで、うらやましい面もあるが、もっと外を駆けずり回って遊べばと思うこともある。

この授業はインタビューの練習ということで私からしゃべることは避けたので十分伝わらないところがあったのが心残りであった。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 元教頭先生、母校で後輩に語る

語り手:三浦孝則さん(武蔵野市在住)
インタビュー:5年1組 3班 3名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■三浦孝則さんのプロフィール

杉五小元教員で昭和30年代後半から40年代にかけて音楽教員として指導にあたりました。その頃に体育館などが新築され、その後西校舎や南校舎が建ちました。その後、教頭として再度杉五小に赴任したそうです。

2つの違う時期の杉五小の様子をうかがいました。

■インタビュー内容

昔の生徒と今の生徒を比べてみると、今より少しきたない服で、コマやメンコなど、外でいろんなことをして遊んでいました。そのころは、テレビゲームがないから、自分で考え出した遊びをしていたんだ。全校朝会では、今の子どもよりも背がびーんとしていて、ぎょうぎがよかった。そして昔の学校にはテレビもなかった。今はコンピューター室にはパソコンがあるけれど、昔はパソコンもなかった。防犯カメラもなかったんだ。



▲杉五小のまわりはずいぶん変わったけど、生徒も昔とは違うね。

昔の杉五小の周辺は、今みたいに家と家の間がきっちりしていなくて、空き地がいっぱいだった。空き地には食べられる雑草もあった。

昔の杉五小は、給食の主食はコッペパンやあげパンなどパンが多かった。

それから、日大二校通りは、今よりお店がいっぱいあって、にぎやかだった。このことから、今より活気があったことがわかる。

■インタビューで一番心にのこったこと

- ・昔は空き地がたくさんあったこと(鈴木舞子さん)
- ・みんな丸メガネだったことにびっくり(三原梨里衣さん)
- ・昔の子は歯のきょうせいをしている子がいなかったこと(木下理子さん)

【三浦孝則さんの感想】

昔の杉五小の子どもたちは、みんな仲が良かった。イジメなんか少なかった。いまはどうだろうか…。給食でおいしかったのはクジラの竜田揚げ。いまはもう食べられないけど、あの味は忘れられない。

音楽の指導は楽しかったけれど、合唱では「鉄腕アトム」を選ぶと、だまっていたも、みんな楽しく歌い出す。教室で歌い始めると、校庭で遊んでいる子どもまで一緒になって歌ったものだ。でも、最近はみんなで歌える歌がなくなった。一人ひとりで好きな歌を歌うのもいいけれど、みんなで歌うのは楽しいと思う。

今の子どもに一言です。きちんと話ができないかと心配していたけれど、今日は上手に話が出来てよかった。よく外国のテレビなどを見ていると、どの子どもも、みんな大きな声ではっきりとしゃべる。あんなふうに自信を持って話すようにしてもらいたい。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】

最近の子どもたちはいそがしい。でも遊ぶことも大切だよ

語り手:都築淳一さん(天沼在住・コンビニエンスストア経営)

インタビュアー:5年1組 4班 3名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■都築淳一さんのプロフィール

杉五小の卒業生です。現在は学校近くのコンビニエンスストアを経営しています。お子さんも杉五小の卒業生で杉五小一家です。約40年ほど前の杉五小や子どもたちの様子、学校周辺の街の様子などをうかがいました。

■インタビューの内容

昔の杉五小の周辺には、あまり建物などたっていませんでした。遊び場には苦労しませんでしたので男子は熊野神社や、沓掛小のそばの空き地で野球やメンコを、女の子は部屋でおはじきやリアンをやっていたそうです。

熊野神社の前に駄菓子屋があって、そこに男女いっしょにおおぜいで、おかしを買いにいていた。買っていたものはビニールの中に入っている梅のジュースやふがしなどで、全部5円や10円だったそうです。それでも少しずつ買っていました。また、別の店では夏はかき氷、冬はたい焼きがあったそうです。かき氷は30円で、いちごとレモン、あずきやミルク味があったそうです。でも、ミルクやあずきは高かったそうです。たい焼きは、すみずみまでぎっしりあんこがつまっていました。子どもたちは暗くなるまで外で遊んでいたそうです。

荻窪、天沼の街には電気屋がいくつかあって、何かを買うと、家にもってきてくれました。木造の家ばかりでマンションなどの大き

な建物はありませんでした。



▲みんなで駄菓子屋さんに買いに行ったのは楽しい思い出だね。

昔はクラスで1クラス約40人でした。クラス数は3つでした。給食は脱脂粉乳で、脱脂粉乳とは粉をとかしたものでおいしくなかったそうです。でも、あげパンは人気だったそうです。

今の子どもに言いたいことは何ですかと都築さんに聞いたら、今の子はいそがしいから、友だちと遊べなくて心配ですね。昔は塾に行っている人が少なかったから、ヒマな子どもが多かった、と言っていました。最後に、杉五小がなくなると聞いてどう思いますかと聞いたら、名前が変わるかもしれないし、自分がいた校舎のおもかけがなくなるかもしれないので悲しい、残念と言っていました。

【都築淳一さんの感想】

当時、体育館ができたばかりで、子どもたちはよく体育館でも遊びました。まだ南校舎はありませんでした。プールはありましたけれど、15メートルくらいの小さなプールでした。それから図工室もありました。

5年生(1964年)の時に東京オリンピックがあり、青梅街道へ聖火ランナーが走るのをみんなで見に行ったことをよく覚えています。ちょうどその頃、小学校のときに各家庭にテレビが入りました。もちろんモノクロで

す。よく見たのは月光仮面などのヒーローものとか、エイトマンなどのマンガでした。キャラクターグッズは売っていませんでしたが、クイズなどでヒーローの写真を印刷したメンコなどがあたりました。

3人の生徒さんたちはインタビューとその記録をとることに対してよく準備をしていたようで、非常にスムーズに進み私は楽しく出来ました。礼儀正しくて気配りもでき感心いたしました。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 途中であきらめない、投げ出さない

語り手：高橋正章さん（天沼在住）
インタビュー：5年1組 5班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■高橋正章さんのプロフィール

甲子園球場で行われる全国高等学校野球選手権の出場経験があります。お子さん達は杉五小の卒業生で、ご長男は杉五小野球部で活躍しました。現在は休部中ですがPTAの野球チームで活躍してました。守備はファースト、打順は5番です。

■インタビュー内容

高橋さんは、小さいころプロ野球の選手になりたいとプロを目指したそうです。幼稚園のとき、学校のかべにソフトボールのボールをぶつけて早くうまくなりたいと考えていたそうです。野球（キャッチボール）する相手がいなかったら…。ずっと続けていると、投げる球すべて真ん中（ストライクゾーン）に入るようになった。また、かべにぶつかってくるボールを受けることでバウンドの球を処理する技術も身に付いた。目をつむっても投げたり受けたりするくらい練習しないとうまくはならないとのことでした。

昔の高橋さんは守備ではピッチャーで、打順では、小学校は四番、中学の時は1番か3番、高校でも1番か3番でした。高橋さんはバッティングがとくいでした。足も早かったそうです。高橋さんはサウスポーでした。努力をつみかさねること、そして小さいころから練習をつみかさねれば、最後はきっと「野球がうまくなりたい」という夢がかなうのだと思いました。

小学と中学では野球がすごく楽しかった

けど、高校からはすごくきびしかったそうです。ノックで100本とか200本と、練習がきびしくなり、苦しかった。しかし、そのおかげで体力だけでなく気力、根性もついたと思うのです。試合に負けても次の試合に向けて一生けん命に練習していました。コーチはいませんでした。バッティングがうまくなるためには、素振りをかかさず練習をすること。投げることについては、相手のむねをねらって投げることだそうです。

野球で大事なことは、みんなで声をかけ合うことだそうです。最近の野球少年をみるとあまり声を出さないことが気になる。苦しい時、負けている時こそ、がんばって大きな声を出すことが大切だ。そこから元気が出てくるのだから。勉強や生活だって同じだと思います。身長が伸びたり、体力が向上したりすると、同じ練習をしていても急激に伸びる時期がある。だから、一度野球を始めたら、途中で投げずに、ずっと続けてやってほしい。うまくなるには続けることが一番肝心です。



▲幼稚園の時から野球が大好きで、野球がうまくなりたいとがんばっていたね。がんばれば、がんばった分だけうまくなるんだよ。

一生懸命に聞いてくれました。とても立派だったと思います。私の話がどのくらい役にたったかわかりませんが、お子さんたちの心に、何か一つでも残るものがあれば幸いです。

今回はお招きいただき大変ありがとうございました。

追伸

先生方、同窓会役員の皆様、このたびはお声をかけてくださりありがとうございました。

原稿の内容を拝見いたしました、大変すばらしい内容で感心いたしました。

お役に立てたかどうか心配ですが今後もご協力できることがあればいいと思っています。

これからの皆様のご活躍を祈念いたしております。

【高橋正章さんの感想】

私の子どもたちが杉五小の卒業生ということもあり、なつかしい気持ちでお邪魔いたしました。今回インタビューしてくれたお子さんたちは、どの子も皆真剣で、私の話を

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 翻訳とは言葉の置き換えではなく、文化の壁を乗り越えること

語り手：児童文学者（天沼在住）
インタビュー：5年1組 6班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■プロフィール

ポケット文庫、杉五小での読み聞かせ活動などで活躍している方です。翻訳活動や読み聞かせについての著書がたくさんあります。翻訳や読書についてお話をうかがった。

■インタビューの内容

翻訳者の仕事は、だれかが書いた本を日本語にする、雰囲気分かるように訳すことです。最初、先生は翻訳者になるつもりがなかったそうです。でも、初めて翻訳する本が、子供向けの本でしたので、中学生が習う英語の単語・ことばを使って翻訳してみたらできた、子どもたちも楽しそうに読んでいたので引き続き翻訳をやっていこうと考えたそうです。

翻訳にはいろいろなルールがあります。たとえば、翻訳をすることでお金がもらえますが、本を書いた人、それを訳した人に関係する約束があります。それをロイヤリティーといいます。ですから、勝手に訳すこと（海賊版）や、ほかの人が書いた本、翻訳した文を勝手にとること（盗作）は法律違反で、もとの本を書いた人や、その本を読んだ人に訴えられてしまい、「ごめんなさい」ではすまなくなってしまいます。

翻訳をするときに一番大切で大変なのは、訳し間違いがないかをさがすことです。何回も読み返し、絶対に間違いのないようにするのです。私ではありませんが、出版さ

れた翻訳本のなかに間違いのある本も少なくありません。そんなときも「ごめんなさい」ではすみません。

先生は、気分転換に自分の好きな人形作りや、その人形をカレンダーに写したりしています。

先生は子どもが本を楽しく読んでほしいと願いポケット文庫の活動をしています。先生は学校を出てすぐ、本が好きなことを生かして、本を作る仕事につきました。でも、学校を出たばかりなので、世の中をあまり知らなかったのです。ですから、最初に作った本はあまりおもしろくなかったそうです。また先生は、子どもができて、子どものために本を買うようになると、自分で子ども向けのいろいろな本を読むようになり、よりおもしろい本を作ろうとしました。それから翻訳をするようになり、今は文庫の人です。

外国のいろいろな本を翻訳し、日本を外国の文化で豊かにしてくれる翻訳者は、私たちにとって大変ありがたいことだと思いました。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 漫画は、人の気持ちも、自分の気持ちもあたためてくれる

語り手:黒川佳胤さん(イラストレーター 本天沼在住)
インタビュー:5年1組 7班 2名

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。



■黒川佳胤さんのプロフィール

杉五小(17期・昭和18年卒業生)、職業でマンガを描いていたわけではないが、小学生の頃よりイラストやマンガを描いてこられた。仕事を退職後、多くのイラストを描き展示していたところを認められ、テレビ、新聞などでも紹介されている。天沼協和会商店街のイラストマップや商店街のシンボル旗なども描いておられる。マンガの楽しさについてうかがった。

■インタビューの内容

テーマ:どうして、絵・イラスト・マンガを描くようになったのか

1) 絵を描くきっかけは、いつ、どのようなことでしたか

杉五小3年の時、先生から「一週間の授業予定表」の上に、面白い絵を描いてくださいと頼まれて描いたのがきっかけです。先生から、「上手に描けている」とほめられたことがうれしくて忘れられない思い出です。好きな科目は図工でした。

2) 大蔵省勤務のときも絵を描きました。

大学を卒業して大蔵省に入りました。昭和28年のころは、テレビやマンガよりも皆は本を読んでいました。仕事は忙しかったが、若人会という部活の「文芸部」に入り「若人」という新聞の編集長をしました。数ある記事のなかで、特に好評でしたのは、職場のなかにある食堂、売店、保健室、電話交換室、理髪室、美容室、エレベーター

などで働き、職員の日常生活を裏から支えてくださる人たちの苦労話や失敗談、職員への希望などを聞いて「職場の花形」という題で書いた、連載たんぼう記事に黒川さんが絵を入れて楽しい読みものにまとめたものでした。



▲マンガを通して人を楽しませたい。そして自分も楽しむ。そんな気持ちで描いています。

3) 天沼協和会商店街(杉五小から日大二高までの日大通り)の「いらっしやい!マップ」と商店街沿いの道路の上にはためく商店街のシンボル旗の「かっぱ」は黒川さんのイラスト作品です。いずれもご近所の商店街の世話役をされているみどり書房の奥川さんから依頼された。いらっしやい!マップは商店を一軒一軒たずねて写真を撮ったり、その店のとくちようにふさわしい宣伝のためのことばを考え、下書き図を何回も書き直しをして作りました。「かっぱ」の旗は、地元の天沼という地名から町に遊ぶかっぱを思いつき、これを招き猫ならぬ招きかっぱに仕立てたので、にぎやかな商店街になるように活躍しています。

黒川さんは2003年から「ほのぼのカレンダー」というマンガカレンダーを出版しました。その絵を1枚、1枚でいねいに説明してくれました。マンガの絵は、すべて色えんぴつで描いています。黒川さんの漫画には必ず「源さん」と「おふじさん」の仲良しコンビが登場しますが「源さん」はお調子もので、いつも周りを明るくさせます。失敗も多

いのですが何でもちようせんする、見ていると元気になるマンガです。

スラスラ描ける時と、描けない時があります。新聞や雑誌などで参考になるものは切りぬいてとっておくそうです。マンガは人のいき抜きで、人の心をいやすものだと思います。

【黒川佳胤さんの感想】

大蔵省を退職後、杉並シルバー人材センターの会員になって、得意の絵でみなさんを楽しませようと毎月絵を描きました。特に「ほのぼのカレンダー」は忘れられない作品です。2001年に大病しましたが、拾った命みたいな気持ちになり、自分の生きてきた足跡を残そうと考えて趣味の漫画を描きだした。それが「ほのぼのカレンダー」です。登場人物は私の分身で「源さん」と「おふじさん」という名で私に代わっているいろいろやって貰っています。月々の季節感を大切にしたいので、季節に合った絵を1枚ごとに、色鉛筆で心を込めて描いています。

杉並区役所のロビーには、シルバー人材センターの会員手造り作品展示コーナーがあり、展示されたほのぼのカレンダーの3月の漫画(春が来た!お雛様)が「アニメーションの街、すぎなみ」の取材で杉並区役所を訪ねたNHKテレビスタッフの目に留まり、「首都圏ネットワーク」および「衛星第一」で全国放送されたりしました。拾った命と考えて再び描きだした漫画ですが私に元気というエネルギーを与えて呉れています。これからも、自分で楽しみつつ、皆様にも喜んでいただけるような漫画を描き続けていきたいと思っています。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 自転車屋のご主人に聞く、安全で楽しい自転車の乗り方

語り手:万田祐三さん(上荻在住・万田サイクル経営)
インタビュー:5年1組 8班 3名

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。



■万田祐三さんのプロフィール

四面道近くの万田サイクルを経営。いろいろなパーツを組み立てて自分に合った自転車が作れること、自転車修理のこと、自転車の楽しみ方などをうかがった。

■インタビュー内容

どうして自転車やさんに、職人になったのか聞いてみました。自転車やさんはおじいちゃんが始めた家の仕事でした。ですから万田さんは三代目になりますが、1970年生まれですから、まだ若い自転車やさんです。

自転車やさんになるために、メーカーの養成所にある2世寮に、4か月住み込んで自転車の組み立て整備士、安全整備士の免許を取りました。

次に職人になってうれしかったことを聞きました。自転車を買ってもらったお客様が自転車に夢中になって、また部品を買いにきてくれて自転車に乗るのが楽しいといってくれた時が一番うれしいことです。万田さんの希望は、自転車に限らず、どのような乗り物でも修理して長く使ってもらいたいといっていました。私たちが新しいものを買わず、修理して使うことが大事だと思いました。また、新しいものより古いものの方が使いやすい、ということも分かりました。

万田さんは、自転車の中で一番早く走る「ロードレーサー」をもってきて見せてくれました。タイヤには溝がなく(早く走るため)、



▲買ってくれた自転車を大切に乘っているお客さんを見るとうれしくなっちゃうんだよ。

持ち上げてもとても軽い。この自転車は世界で一番大きな自転車メーカー製で競争用に使うものです。自転車レースはヨーロッパのフランス、イタリア、スイスなどで盛んですが、この種類の自転車で競争するのだそうです。なかでも一番有名な自転車レースは、ツールドフランスといってフランスの国の中やアルプス山脈など、3300kmも走るレースです。走る途中で故障もするので、すぐ直せるように、六角レンチ7本で自転車を組み立てることができるようになっている。



▲これは「ロードレーサー」といって競走用の自転車だよ。「かるーい！私でも片手で持てちゃう」

最後に、自転車に乗るときは安全を確保してくださいとのことでした。ブレーキや、前のライトを点検する、後ろにあるテールランプは汚れていないかを見ること。できたら、義務ではないけれど頭にヘルメットをかぶってほしいといっていました。善福寺川沿

いにある交通公園にもいってくださいとのことでした。インタビューをして一番心に残ったことは、夢をもっていれば必ず成功するということです。

【万田祐三さんの感想】

自転車は大変便利な乗り物です。好きな時に何処でも行けます。また、リハビリに使用したり、効率の良い有酸素運動としても注目されていますが、正しい使い方をしないと大変な危険な乗り物でもあります。

次のことには注意をしてください。

1. 交差点では飛び出さない。
2. 道路の左側を一列で走る。
3. 暗くなったら早めにライトを点ける。
4. ブレーキが効くか点検をする。
5. 出来れば、ヘルメットをかぶる。

ライトが点かなかったり、ブレーキが効かない時は、近くの自転車屋さんで点検してもらいましょう。ルールを守って楽しく自転車に乗ってください。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 もうすぐ創立80周年だよ～後輩に思い出を伝える同窓会会長

語り手:水島隆年さん(建設会社経営 天沼在住)

インタビュアー:5年2組 1班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の思い出」
がある。



▲今年は杉五小の80周年だね。記念式典ではいっしょに楽しめよう。

■水島隆年さんのプロフィール

杉五小卒業生。現在は杉五小同窓会会長で、建築会社を経営されている。約50年前の杉五小子どもたちのこと、また戦争中の様子などをうかがった。

■インタビュー内容

・昔の給食は、意外とおいしかったと言っていました。特においしかったのはクジラの肉だったそうです。でもクジラの肉は年に2～3回しか出なかったそうです。嫌いなものは脱脂粉乳だったそうです。

・昔はやっていた遊びは馬とびだそうです。ぼくたちはベーゴマだと思っていたので意外でした。でも、危険なので禁止になったそうです。せっかく楽しい遊びだったのに禁止になったのはかわいそうだと思います。

・水島さんの今の趣味は、山登りで、次の日は筋肉痛になることもあるそうです。

・水島さんは建設会社の社長さんなので、このごろ問題になっているA建築士のことを聞いてみたら、「同じ建設会社としてはずかしい」と言っていました。

・以前は、ほかの社員に渡した給料の残りを水島さんがもらっていたそうです。社長さんは大変だと思いました。

・社員の人たちがちゃんと生活していけるように考えていくことが、社長さんの役目なのだそうです。

【水島隆年さんの感想】

お手紙ありがとうございます。

楽しい一日をつくっていただき、感謝いたします。

50歳も違う貴方がたと話ができて、皆さんの考え方がわかり、大変参考になりました。

杉五小の歴史については、少し説明が不足していました。

今年10月28日には開校80周年式典を、同窓会・学校・PTAでやります。その時には、杉五小80周年の記念誌を作ります。楽しみにしてください。がんばって学校へ通ってください。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 二度とあってはならない戦争、その最中での子どもたちの暮らしとは・・

語り手:藤原康雄さん(天沼在住)
インタビュー:5年2組 2班 3名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■藤原康雄さんのプロフィール

杉五小卒業生。(昭和22年卒業、第21期)前杉五小同窓会会長。会社の社長さん
もつとめられた。約50～60年前の杉五小や
子どもたちの様子、戦争中のお話などをう
かがった。

■インタビューの内容

藤原さんが小学校1年生の時に戦争が始
まり、4年生の8月に長野県に学童疎開をし
ました。その時、杉五小には、約千人の児
童がいて、そのうち学童疎開をしたのは約
450人でした。田舎に親戚のある家族の子
どもは縁故疎開といい親戚の家で暮らしま
した。天沼に残る生徒も少なくなったので
「戦時教習所」という名前で学校の近くの家
を借りて勉強を続けました。江戸時代の寺
子屋のようなものです。杉五小の校舎も兵
隊の宿舎になってしまいました。疎開先で
は現地の小学校にかよったり、寮で勉強を
しました。

学童疎開では、お腹がすいて、とても苦し
い思いをしたそうです。おやつは大豆を自
分の年の数だけしか食べられなかった。ま
た、すごす部屋は北風がふくのかかわら
ず、北側は紙1枚の障子しかありません。それに暖房もなくて、ただ暖まれるの
は、たったひとつのこたつだけだった。

昔の遊びはベーゴマで遊んでいました。
正月になると男の子はたこあげ、女の子
は、はねつきをして遊んでいたそうです。

ベーゴマは、コマの周囲をギザギザに尖ら
せて勝負をしました。勝つと相手のコマをも
らうことができ、たくさんコマを持っている子
どもは仲間から尊敬されたものです。メンコ
もよくやりました。メンコには、当時人気のあ
ったお相撲さんの写真などが印刷されてい
ました。戦後は野球に熱中しました。運動と
いえば野球くらいしかなかったこともありま
す。杉並の学校は昔から野球が強かったの
です。毎日、暗くなるまで友だちと外で遊ん
だ。テレビでNHKの放送が始まったのは
大学生の時でした。

杉五小の校庭にある桜の木は昔もあつた
そうです。それに、昔、桜の木は何本もあつ
たそうです。藤原さんは、これからも桜の木
を大切にしてほしいと言っていました。学童
疎開をしたことを教えてもらったことが一番
おどろき、心に残りました。



▲戦争中のことで思い出すのは、学童疎開ですね。
もちろん、遊びもしましたよ。でも今はまったくくちがい
まね。

【藤原康雄さんの感想】

1 短時間のこともあり私の話したことも舌足
らずのところがあったと思いますが、学
童疎開の経験は強い印象をもってくれたよ
うで嬉しく思います。校庭の桜の木のことを
突然聞かれて少々面食らいました。インタ
ビューは、なぜそのことを尋ねるのかを最
初に伝えた方が応える方は話しやすくなる
と思います。

「疎開」という文字は「疎(まばらにする)」
と「開(ひろがる)」という意味からなってい
ます。もともと軍事用語で、分散して闘いをす
すめるという意味の言葉です。都市で足手
まといになる者を地方に送り出して、都市の
防空体制を強化するとともに、将来の戦力
となる子どもたちを温存するためでした。私
の同期生は1944年8月から1945年11月(小
学4年～5年)まで、1年あまりを両親と離れ
て、子どもたちだけで生活しました。修学旅
行のような気分が出かけたが、戦争が激し
くなると食料もなくなり、畑からこっそり作物
をとって食べたりもしました。衛生状態も悪
く、ノミやシラミに悩まされたものです。今の
若い人たちには、そんな生活は想像もでき
ないことでしょう。つらかったけれど、その時
に鍛えられて強くなったと思うこともあります
。戦争中の生活も、今となってはよい思い
出でもあります。でも、やはり戦争はよく
ないことだと思います。

2 私の相手をしていただいた三人にメッセ
ージです。

先日のインタビューご苦労様でした。勉強
のまとめを拝見しました。みなさんと同じ年
頃に学童疎開という異常な体験を経験した
私たち世代は、これを後世に伝えて二度と
こういうことを起こさないようにする義務があ
ると思っています。これからの長い人生で
は、多くの出来事に遭い多くの人々に会い
、いろいろと吸収して学んでいかれることと
思いますが、その時には杉五小で学んだこ
のインタビューの技術を思い出して、あなた
の知識を増やし頑張って豊かな人生を歩
んでください。ありがとうございました。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 昔、私が先生をしていたときには、生徒が750人もいたんだよ

語り手:小野忠さん

インタビュアー:5年2組 3班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■小野忠さんのプロフィール

元杉五小教員。昭和40年代前半(1966年)から40年代後半にかけて子どもたちの指導にあたる。体育館の新設、西校舎や南校舎、屋上プールの建設などがあり、児童数も増え、学校の施設、設備も変わっていく時期に10年間教員をつとめられた。

■インタビュー内容

小野さんが杉五小の先生だったころは、先生だけで25～30人もいたそうです。そして、各学年は3～4クラスあり、1クラスに約35～36人いたから、全校児童は約750人くらいだったそうです。子どもは今と変わらず元気で明るく、なわとびやオニごっこ、ボール遊び、サッカーがはやっていたそうです。

小野先生が教えるのが好きだった授業は体育と国語で、教えるのが苦手だった授業は音楽と家庭科だったそうです。校庭が狭かったので、先生方はいろいろ工夫し、また教えあって、子どもの体力づくりをしたそうです。その一つとして毎朝、全校児童が、レコードにあわせて校庭と屋上に分かれて5分間マラソンをしました。高学年の男の子は裸で走りました。終わるとマラソンカードに走った距離を記録したそうです。運動会は日大二校のグラウンドを借りてという声がありましたが、広すぎるということでやめたそうです。

小野さんが杉五小の教師をしていたのは

1966年から1975年で、ちなみに若い頃の給料は15000円くらいだったそうです。本校舎はすでに鉄筋校舎で、鉄筋のモデル校舎として建てられ、杉並では唯一、各教室にはベランダがありました。今の体育館ができたで、子どもたちは体育館を使うのが大好きだったようです。水泳もよくやりました。いまの学級園のあるところにプール【(縦)約15m、(横)約10m】があったそうです。プールといっていますが、最初は「防火用水」として昭和18年ごろに作られたそうです。小野先生が赴任したころは、杉並の小学校中、正式なプール(25m×12m)があったのは10校くらいだったそうです。この狭いプールで水泳をしていたので、生徒は水泳の自信がなく分区の記録では成績は振るわず、そこで希望者に何人かの先生が夏休みの水泳教室を約30日間やったこともあったそうです。何年かたってから南校舎の屋上に杉並区でははじめての屋上プールを造っていただけることになり、先進区の板橋区の小学校4～5校に見学にいき屋上プールの長短をきいて建設の参考にしたそうです。



▲体育と国語を教えるのは好きだったけど、音楽と家庭科はちょっとね・・・

夏は暑く7月中旬から9月上旬までは給食後下校だったそうです。もちろん扇風機やクーラーはありませんでした。給食の種類は少なかったそうですが、味は大変良かったです。(文部省の給食奨励校、昭和38年のころ)。カレー、コロッケ、スパゲッテ

ィーなどが好評でした。

特活と移動教室のことも聞きました。特活の部活動は7～8部ありよく活動していました。代表委員は学校での決まりを相談したり、大行事の手伝い等を活発に活動していたようです。移動教室は千葉内房の「富津学園」(桃井第一小の古い教室を移すが老朽化する)、その後「富士学園」が建設されました。現在わたしたちが利用している富士学園は第二代目の建物です。

最後に小野さんの話を聞いて、こんな歴史がある学校なのに合ぺいするなんてもったいないと思いました。

【小野忠さんの感想】

<気が付いたこと>

- ・聞く態度がよかった。
- ・聞く内容をたくさんノートにメモしてあった。
- ・質問時の声が小さかった。
- ・一つ質問され、それについて答えるとすぐに次の質問を出す、関連した質問を出し、話題をもう少し深めるほうがよいと思った。

<座右の銘>

たった一言が、人の心を暖める。

たった一言が、人の心を傷つける。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】

赤く燃えさかる空襲の下で、両親と生き別れたあの日

語り手：奥川禮三さん（みどり書房経営 本天沼在住）

インタビュアー：5年2組 4班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■奥川禮三さんのプロフィール

日本大学第二中学校・第二高等学校前でみどり書房を経営。第二次世界大戦のとき、東京大空襲でご家族をなくす体験をされた。戦争中の生活などについてうかがった。

■インタビュー内容

奥川さんの子どものころ、住んでいたところは、現在の墨田区ですが、昔は本所区千歳町といったところでした。小学校は、今のJR線両国駅の南側の墨田川が流れているすぐ近くの江東尋常小学校といいました（今は、この学校はありません）。

楽しかったことは、戦争中ですが、空き地や広っぱがあちらこちらにありましたので、チャンバラごっこや三角ベース野球をやって遊んでいたそうです。学校の休み時間は校庭や屋上でドッチボールやおいかけっこをしたそうです。屋上でもボール遊びができたそうです。学校に行って、遊んだ後、家の手伝いをしました。家は、ご婦人用の高級ぞうりやさんでしたので、義父が家で作った立派なはきものを問屋さんに届けます。両国の周辺はぞうりや靴をつくる会社がたくさんあったところでした。

東京大空襲のはなしを聞きました。アメリカの飛行機が東京に飛んできてたくさん爆弾を落として大きな被害が出はじめたのが1942年（昭和17年）の4月のことです。それからなんども空襲がありました。杉並区では

1944年11月に今の青梅街道の荻窪にある旧日産工場跡（中島飛行機工場）にB29が飛んできて爆弾を落としました。これからの東京はほとんど毎晩のようにB29がやってきて爆弾、しょうい弾を落とし続けました。

奥川さんは、1945年3月9日、午後9時30分～10時に警報がなったのを覚えていますが。ご両親と一緒に、火災から逃れようと外に出ましたが、大勢の人々が一緒に同じ方向に逃げるから、途中でご両親とはぐれました。自転車に蒲団を積んで両国橋のそばまで行きましたが、疲れて動けないので、すぐそばの空き地にへたり込んでしまいました。そこから動けなかったのを助かりました。両国のあたりは、隅田川と荒川にはさまれた地域なので、焼け出された人たちはこの川に飛び込んで熱さを逃れようとしたのですが、あまりにも火が強いので、逃げる場所としてはよいところではありませんでした。

空襲の翌日、家は焼け落ちて、周りは焼け野原で真っ黒でした。この世のおわり、じごくのようだと思いました。



▲子どもだったから戦争中でも遊びの中に楽しみを見つけていました。あの日までは・・・。

このインタビューで一番心に残ったのは、空襲でなくなった人が、寝ているように並んでいる写真を見たことです。このことから、わたしたちは、東京大空襲について、同じあやまちをくり返さないでほしいと思います。考え方を身に付けると将来役に立ちます。

【奥川禮三さんの感想】

書店の開店準備をしている朝8時ごろ、店の前を黒い、赤いランドセルを背負って色とりどりの服を着た子どもたちが学校に向かっています。時には、忘れ物をした子どもが道を逆にかけぬけていきます。こうした風景は私が小学生だった頃と少しも変わらない平和で幸福な姿です。これからもずっとずっと続くことを願っています。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 おじさんは、昔はハト好きの子どもだった。警察犬も育てたんだよ

語り手:井口昭英さん(獣医師 杉並郷土歴史会副会長 清水在住)
インタビューー:5年2組 5班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■井口昭英さんのプロフィール

大正14年生まれで、杉五小より1才年上だそうです。清水・天沼付近の戦前戦後の様子、現在との比較などの話を聞きました。獣医さんとして警察犬になるようなシェパード犬を育てた経験もあります。

■インタビュー内容

昔井口さんは、今の妙正寺付近に住んでいた農家で11代目、約350年も続いた家のかたです。杉並郷土歴史会の副会長さんをしていますが、歴史に詳しいので清水、天沼の歴史について教えていただきました。

井口さんの家は農家でした。10人兄弟の下から2番目で一番上の人とは17才も違うそうです。子どもの時から動物が好きで、特にハトはたくさん飼っていました。昔は新聞社や軍隊では急ぎの連絡にハトを使ったそうです。そして軍用に登録するとエサが配給になったそうです(子鳩を供出するとエサ代になりました)。

昔の農家は食べ物自分でつくっていたので困らなかったけど、家にお金はあまり無かった。現金収入、つまり、お金を手に入れるために今のサミットのあたりにあった八百屋さんが仕入れに来る野菜市場に農産物を出荷していました。現金収入が増えたのは住む人が増えて、地代が入るようになってからだそうです。

また、家に現金が少なかったからおこづ

かいもほとんど無かった。遊び道具は自分でつくりました。竹馬のりの竹馬や凧あげの凧も自分でつくったそうです。女の子が遊ぶ羽根つきの羽子板も羽も自分たちでつくったと聞きました。遊びは今と違って外で遊ぶことが多かった。家の手伝いが無い時はよく遊びましたが、親に勉強しろと言われたおぼえはないそうです。「たぶん、親は体を動かすことが好きでないと働き者にならないと考えていたのだろう」と井口さんは言います。

今のような商店街もなくておぼえているお店は、ポンプ屋さん、ふとん屋さん、タタミ屋さん、ほかには今のセブンイレブンのところに「三州屋」という雑貨屋さんがありました。昔はおこづかいがあってもお店が少なかったの、買えるものもあまりありませんでしたが、今はお店がたくさんあって、お金さえあれば何でも手にはいるので便利になったと言います。



▲おこづかいは、なかったねえ。おこづかいを使うようなお店もありませんでした。

警察犬の話も聞きました。井口さんは、獣医さんですが日本警察犬協会の理事長さんもしていたので警察犬のことは詳しい人でした。警察犬になる犬の種類は7種あるそうです。代表的な犬はシェパードですが、性格が自分本位でなく忠実、表と裏がない、主人にいつもお供をするという性質を活用して警察の仕事に協力している。人間の5歳ぐらいの子どもなみの知能を持っているそうです。うっかりするとシェパードに

負けそうです。子犬の時の写真と成犬になってからの写真を何枚も見せてくれましたが、良い警察犬になる犬は子犬の時から体がしっかりして姿勢も良いです。写真ではわかりませんが、良い犬は動きもほかの犬とちがうそうです。

最後に、子どもの時にやった「十六武蔵(じゅうろくむさし)」(注)というゲームを教えてくださいました。おもしろかったです。

(注)「十六武蔵」:奈良時代に考案されたとされる、駒の数の異なる2人用のゲーム。1個の武蔵(親)駒を持つ側と、16個の捕り手(子)駒を持つ側に別れて遊ぶ。

【井口昭英さんの感想】

小学校5年生ぐらいの子どもさんと直接はなしをする機会が無くなっていた私ですが、インタビューを受ける立場にはじめてなって、いろいろ考えた末に、結局あまり構えずにその席に臨もうと考えました。

終わってから考えたことは、もう少し学校付近の商店の話や、昭和10年代の省線電車のこと(今のJR)、荻窪駅周辺のことを話せばよかったかなと思返しています。

しかし、インタビューの子どもたちのまとめた報告を見て、肝心のことはキチンと聞いてくれていて、あ、こんなことしちゃったんだと感心しています。

近年耳が遠くなって補聴器を使っていますが、この点インタビューの子どもたちに迷惑をかけたかな、と思っています。

そして、この時期の子どもさんたちと、また、(あるいは、もっと)子どもの頃の話をしてみたい。それは、むかし囲炉裏ばたで父母や近所の小父さんたちの話を聞いていたような雰囲気、と思っています。

尚、最後に時間がなくてあまり詳しい説明ができなかった「十六武蔵」のことですが、明治15年生まれの父親から教えてもらった、このゲーム、なかなか面白いものなの

↘

で是非次代に伝えておきたいと思っています。
「十六武蔵」のつくり方、遊び方の資料
を杉五小においできましたので休み時間
を利用して遊んでください。お世話になりまし
た、おれいを申し上げます。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 音でコミュニケーションする“即興音楽”の楽しさ

語り手:新井陽子さん(NPO法人 西荻まちメディア会員)
インタビュー:55年2組 6班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の思い」
がある。



■新井陽子さんのプロフィール

「音のワークショップ」を開催、音楽の楽しさを伝える活動をされている。音楽の楽しさなどについてうかがった。

■インタビュー内容

即興音楽をやっている新井さんです。即興音楽は最初、メロディーも伴奏ありません。2006年11月に杉並第4小で幼稚園園児と小学生とがチームになって学習発表会をしました。その様子はというと、即興の音で物語を作るという「音でものがたり」がテーマでした。

森があります。遠くで雷が鳴り(太鼓)、木々が(4年生の人)枝をゆらし、小鳥(笛)、リスやキツネが(自分で作った楽器はペットボトルや牛乳パックでつくったもの)歌ったり飛び跳ねます。森は、生命のある植物や動物が安心してすんでいるところです。このような「森のものがたり」を音で表現して遊びました。

普通、音楽の演奏は練習に一番時間を使います。即興音楽は、そのとき出したい音を好きなように出して良いのです。難しいテクニックを使えなくともかまいません。今まで学んできた音楽だけでなく、その人自身の考えや生活のすべての中から音が出てくるものなので、そこが楽しいのです。

いつから音楽が好きになりましたかと聞きました。

小さなときは絵かきさんになりたいと思っ

ていましたが、違う道に入ってしまった。4才から5才のときに音楽が好きになりました。NHKの「みんなの歌」という番組で歌う「病気の子猫」をお姉さんが歌うと、聞いている新井さんはなぜか涙がでて仕方がありませんでした。音楽に反応する心がもうできていたのかと思います。

幼稚園に入って歌をたくさん歌いましたが、これも楽しかった。卒業するとき1年下のクラスの子供達が合唱で歌ってくれた曲が、小学生になっても心に残っていて、あの曲は何という題名なのかなあ、といつも気になっていました。その曲はあとで「子守唄」という題名だとわかりました。



▲自分の音楽をつくることはみなさんにもできます。

6才年上のお姉さんがひくピアノの音を聞きながら、自然に自分でまねてピアノをひくようになりました。中学・高校ではロックに興味を持ちましたが、ロックにもクラシックをつくるのと同じ方法があることがわかり、クラシックにも興味を持つようになりました。

大学ではクラシック音楽と現代音楽などを学び、また、日本の音楽やガムランというインドネシアの音楽も勉強しました。そして色々な音楽を演奏して行くうちに、「自分自身の音楽をつくる」ということを考え始めました。

新井さんの音楽のアイデアはどんなときに出てくるのでしょうか。

自分が心の中で考えていることを音であらわすのですが、楽器に向かい、これでい

いか悪いのかいつも自分で演奏するうちに新しい発見が出てきます。人の心が変わるように音で表す方法もかわります。本をよんだり、人とはなしたりいろいろなことを吸収していくことが大切です。

【新井陽子さんの感想】

私は「即興」という形で音楽をやっています。「即興音楽」(フリーミュージック)とは、最初から決められたメロディーもリズムも、伴奏ありません。演奏するものを覚えていてそれをやるのでもなく、その日その場所でその時間に、音楽をつくってゆく音楽です。

演奏する時には、その場の雰囲気、聴いている人たちの空気に反応して演奏します。その音楽には、するどい音、明るい音、モヤモヤした音、荒々しい音、不思議な響き、不規則なリズムなどいろいろな要素が取り込まれ、音すべてがOKです。きれいな音じゃなきゃダメ! ということはありません。

演奏する人が表現するものには、その人の考え方や色々な体験が取り込まれています。色々な音色を出すために、楽器の演奏の仕方でも普通に演奏するのと違ったやり方をすることがあります。たとえば、ギターは弦の調律をいつもと違うやり方をしたり、弦に割り箸のような棒をはさんだり、輪ゴムを通してなど、演奏する人の音の好みに合わせて音を出す方法を考えます。

そのようにして演奏することで、「ジャズ」とか「クラシック」とか「スマップ」とかの、すでにこの世にある音楽の「形」を抜け出して、「自分自身」の音を見つけて表現し、音楽を創ってゆくというのが「即興音楽」です。

一般に「即興音楽」という言葉はあまり知られていないかもしれませんが、最近はコマーシャルの音楽や、子どもやお年寄りの

↘

方々、障害者の方達のワークショップなどにもずいぶん取り入れられるようになりました。

聴けば初めは誰もが「むむっ？ これが音楽？？？」と思うことでしょう。けれども一度聴いたら、その迫力や面白い音が心のどこかに引っかかって残り、その謎を解くためにまた聴いてみたくなる、やってみたくなる。今そこにいるあなたも「表現する人」になれる。「即興音楽」はそんな音楽です。

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 野球一筋の人生から学んだこと

語り手:高良武士さん(國學院久我山高校野球部監督)
インタビュー:5年2組 7班 4名

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■高良武士さんのプロフィール

國學院久我山高校野球部監督。同校は野球で有名で、卒業生に米大リーグ・ホワイトソックスで活躍する井口資仁選手もいる。

■インタビューの内容

まず、少年時代のことを聞きました。

学校が終わると走って家に帰る、かばんを自分の部屋におくとすぐ、家の近くの善福寺公園にいった野球をしました。高良さんは小学3年から今まで野球ひとすじの人生です。小中高大と、キャッチャー以外のすべてのポジションをやっていたので、各ポジションの選手の気持ちがよく分かるそうです。ピンチのとき、そうではないとき、選手がどのようなことを考えているのかが分かるので監督ができると思う。

次に、野球がうまくなる秘密があるのか聞きました。

野球のうまくなる秘訣は、まず、手元にもグローブとボールをおいておく。時間ができたらグローブをはめて、ボールを握って、自分のグローブに投げる。手のひらにいつもボールがある感触を楽しむことが大切です。ぼんやりする時間、ひまな時にグローブやボールをいじっている、これで野球が好きになる。それが一番の秘訣です。野球が好きになれば、今度は野球がうまくなる方法を考えます。うまくなるには、家に帰った後、どこかの広場でランニング30

分などのトレーニングをやったり、野球の練習がある時には、最初にグラウンドに来て練習の準備をしたりする。グラウンドの状態を見る、足を痛めそうなどを見つければ自分でグラウンド慣らしをする。練習が終わった後は、片づけをさっさとやり最後に帰る、などをよここんでする。すべて自分がうまくなるためにやっているという気持ちになれば野球を心から楽しめます。でも昔の野球はスパルタ式で、練習を一度でも休むと「もうこなくていい」とか言われて悲しい気持ちになったこともあるそうです。



▲野球がうまくなるための秘密ですか？ありますよ。

高校生になると、1年間で野球をしない日はお正月を含めて1週間もない、毎日毎日ボールを握ってバットを振る。素振りは一日に300回、400回くらいやると手にタコができるので、強いボールをグローブで受けても痛さをあまり感じなくなる。野球がうまくなったと自分で実感するには、やはり時間がかかるもので、毎日毎日、練習を続けることが大切でずっとのことでした。当たり前のことを毎日黙って続けていくことが野球の楽しさ、うまくなる方法だと教えていただきました。

高良さんに甲子園野球大会のことを聞きました。

國學院久我山高校の野球部の歴史は、戦争が終わった年、1945年に始まったそうです。今年は野球部ができて60周年目にあたる。久我山高校は甲子園には春と夏の大会で4回出た。1979年の春の大会では、

選手として出場、1991年の夏大会には監督として出場したそうです。甲子園大会は、野球の歴史のなかでもっとも大きな野球大会です。そして東京の予選で1番にならないと出ることができない。学校、野球をする選手、コーチ、監督が、皆目標にするのが「甲子園出場」です。甲子園に出ることは簡単ではない、簡単ではないから努力をする。努力がむくわれて出場できたらうれしい。簡単に手に入るならうれしくないといっていました。

【高良武士さんの感想】

野球少年がまず目標にするのが甲子園。その夢の舞台に選手・監督として2度も立てたことは、とても幸運でした。しかし、その甲子園では勝利を手にすることはできず、悔しい思い出しかありません。自分の力、日ごろの努力の足りなさを痛感しました。現在は、指導者となり、生徒たちに同じ悔しさを味わせないよう、日々指導しています。そして目標に向かって努力することが、人間を成長させ、どんな困難にも逃げずに正面からぶつかり乗り越えられる強い「心」が養われると思います。

現在、シカゴのホワイトソックスで活躍中の井口資仁は國學院久我山高校出身です。彼は、高校時代、グラウンドに一番最初に来て、一番最後に帰ります。とにかく「うまくなりたい」と感じられる練習をします。当時から将来プロ選手になりたいという、大きな夢に向かって努力していました。

野球が好きな少年少女にメッセージです。

“好きこそものの上手なれ”という言葉があります。上達への近道は、まず自分が好きでやるかどうかにあると思います。練習をやられているとか、つらいと感じているうちはうまくなりません。本気で野球を好きにな

↓
ってください。そして野球はチームスポーツ
です。仲間と力を合わせて、野球を楽しめ
れば、自分もチームもどんどんレベルアッ
プしていくはずですよ。

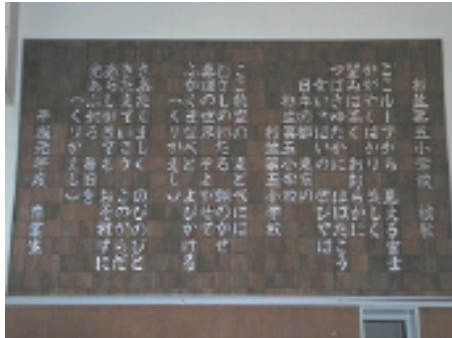
最後に、自分の力・可能性を信じて、“夢”
に向かってがんばってください！

特別編【杉並第五小学校「インタビュー名人になろう」】 国語学習「インタビュー名人になろう」を通して子どもたちが得たもの

寄稿:杉並区立杉並第五小学校

5年1組担任 根岸 洋子、5年2組担任 島田 和崇

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



▲左:昔の木造校舎、右:現在の校舎

本校は今年度、「基礎的・基本的内容の定着をめざして」校内研究を深めてきました。具体的には、国語科を通し、話し合う聞き合うことのできる子どもの育成に取り組んでいた折でしたので、「知の市庭」の方から、「子どもたちが地域の方々にインタビューする活動をしてみませんか。どんな方にインタビューしたいか、希望を出せば、それに沿ってインタビュー相手を決めます。」というお話があった時、地域の方と交流という内容に惹かれてお受けすることにしました。

高学年の 国語に「敬語の学習」がありますが、社会状況の変化に伴い価値観も多様になった今は、子どもを取り巻く環境の中で敬語が使われることも少なく、学んだことを生かす場がほとんど無くなりました。言葉の力をつけることは、子どもの学習力に直接繋がることですから、人と人との関わりあいの中で学ぶ場を計画的に設定して、基本的な言葉の定着を図ることが必要だと考えました。

また、この子たちが6年生になった年に本校は80周年を迎えます。地域の方々から「昔の杉五小のこと、周囲の町並みのこと、そのころの子どもたちの生活等」を直に話して頂けるといふこともあり、このお話は願ってもないチャンスでした。子どもたちに聞いてみたい内容を尋ねると、思ったより「杉五小について知りたい。」という希望が多く、学校への思いが深いと感じました。

まず、聞きたい内容によってグループ作りをして、インタビュー前に質問する事柄を文にまとめ、筋道を立てた話し方を目指しました。そして場に応じた適切な言葉遣い、敬語の使い方や話し手の意図を考えながら聞くことも、高学年として身に付けさせたいと考えました。授業計画はおおよそ、次のようになります。

i. 模擬練習をし、言葉づかいや態度等をアドバイスし合いました。

ii. インタビュー当日は、インタビューするグループとそれを見学するグループに別れ、意欲的に話を進めたり、相づちを打って聞いたり、記録を取ったりしました。見学者は、気が付いたことをメモながら見学しました。

Ⅲ. インタビュー内容をまとめ、グループ毎に発表し合いました。劇化したり、アナウンス形式にしたりと楽しんで取り組みました。そして、メモしたことをもとに意見を出し合うことで、お互いのインタビュー内容や発表の工夫のよいところに気付くことができました。

成果として、友達の発表と自分の意見の同じところや違うところに気付いたり、考えるよさに目を向けて聞いたりすることができるようになってきています。今まで、発表の声小さかったのに、大人の方に上手に話

をリードしてもらってインタビューが弾んだことや、相互発表で友達から誉められたことで、自信を持って大きな声で発表するようになった子もいます。

また、個々が興味があることをベースにインタビューグループを作ったことや多様な分野のゲストティチャーに来て頂いたことも、目的を持って話し合うことへの興味関心を高めました。そして、お礼の手紙を書いたり、連合音楽会に来て頂いたりと学習後にも関わりを深めることができました。教科書の中の知識になりがちだった敬語を「生きた言葉」として使うことができたことはもちろんですが、相手を認め、会話を楽しむことができるようになったことが1番の成果ではないかと思います。

地域の皆様には、ゲストティチャーとして、杉五小の歴史を始め、生き生きと活躍なさっている“今”を子どもたちに伝えて頂きました。子どもたちは、大人が頑張っていること、頑張っていることは結構楽しいことで、こんなにかっこいいものなんだということを十分に感じ取れたのではないかと思います。

わたしたちも、子どもたちと一緒に学ぶことが多くありました。中でも、ゲストティチャーの皆様が本校児童の学習のために、十分に準備をし、真剣にお応えくださった姿勢に深く感銘を受けました。地域の皆様が子どもたちとこうして、また、何らかの形で関



▲左：昭和10年、校庭で体操する子どもたち 右：現在、プールで遊ぶ子どもたち

わりを持ってくださることで、子どもたちも大人に対しての親愛の気持ちを育み、社会参加への芽を伸ばしていくことでしょう。お忙しい中、本当にありがとうございました。

また、インタビュー時にお付き合いくださった上、拙い子どもたちの原稿から立派なホームページを作成してくださった知の市庭の皆様、学習の場を提供しお世話してくださった学校コーディネーターの方に深く感謝致します。